



中国江南地域における伝統的集落に関する研究

K99067 千葉千草

1 はじめに

1-1 研究目的

中国は広大な国土を誇り、地形や気候がかなり複雑な国家である。長い歴史の中で生まれてきた幾つもの文明や民族が、地域的な特徴をもつ都市や集落をつくり上げてきた。

その中でも本稿では、揚子江南に位置する江南地域の蓬溪村を取り上げ、その村の集落および建築の形態について研究する。集落内の集合形式、伝統的住居の平面構成を分析すると共に、宗祠と呼ばれる村の宗教建築も分析し、この地域の特徴を明らかにすることを目的とする。

1-2 研究方法

2002年7月21日から8月7日にかけて浙江省永嘉県蓬溪村における調査を行った。実測調査対象は宗教施設4棟と、伝統的な住居9棟である。また集落において村長や住民にヒアリング調査を行った。この調査結果を元に、文献調査や先行研究をふまえて、集落について分析を行う。

- ① 調査地の野帳図をCAD図面におこし、それぞれの建築の平面構成を分析する。
- ② 調査地の集落図を作り、村の方位や規模、住居や宗教施設へのアプローチの仕方を分析する。
- ③ ヒアリング調査から集落の集合形式や、生活の仕方などを分析する。
- ④ ①より伝統的住居と宗教施設の建築形態を比較する。
- ⑤ 全体を通して考察し、調査地の特徴を明らかにする。



図1 調査地集落位置



写真1 主要道路

2 調査地の概要

蓬溪村は浙江省永嘉県に位置する集落である。このあたりは江南地域と呼ばれ、楠溪江という中流河川に沿って数多く漢族集落が存在する。蓬溪村はこの河川の流域にある。

この村では政府の管理強化により、1960年に南東から北西へと伸びる主要道路(写真1)がつくられた。それと垂直な道が南西へ伸び街区が形成されている。その主要道路を中心として、北東は田畑となっており建物のほとんどは南西に配置され、集落を成している。この村ではそれぞれのまとまりごとに先祖を祀っており、曲がって流れている鶴盛溪は弓であると捉え、争いごとが起こらないようにと、集落の北に守り神として関帝廟が置かれている。



図2 蓬溪村 調査対象表記図

表1 調査住居 概要一覧表

蓬溪村	住居名	居住者	建設年代	住居向
R-1	花 塢	謝慶潮	1820~1850	北東
R-2	文之堂	謝用永	1820~1850	北
R-3	清美堂	謝春之	1700~1800	北東
R-4	李時瞻宅	謝岩明	不明	北東
R-5	玉徳堂	謝用興	1800年以前	北東
R-6	水院 (後)	謝迪端	400年前・200年	北東
R-7	水院 (前)	謝德明	不明	北東
R-8	水院 (前)	謝迪端近親者	不明	北東
R-9	質屋	謝氏 某	不明	北東

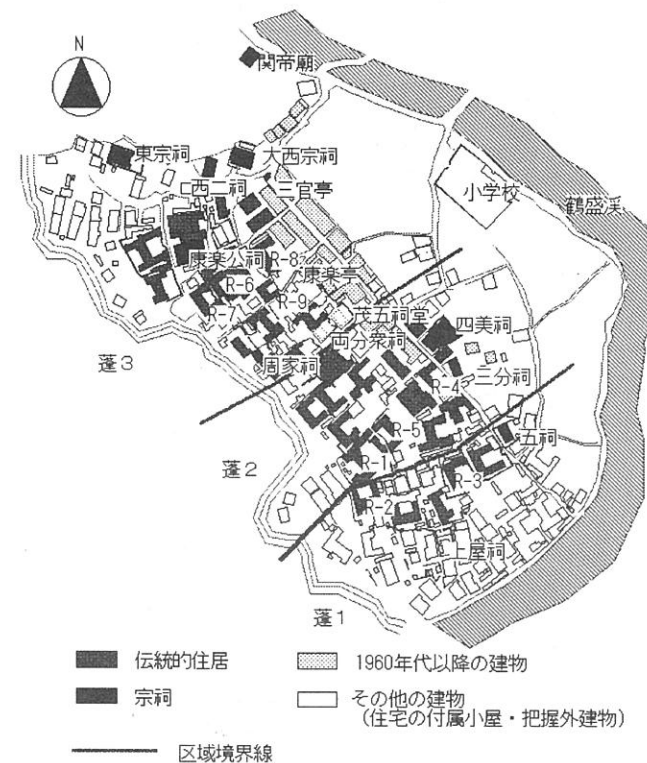


図3 蓬溪村 建築物分類図

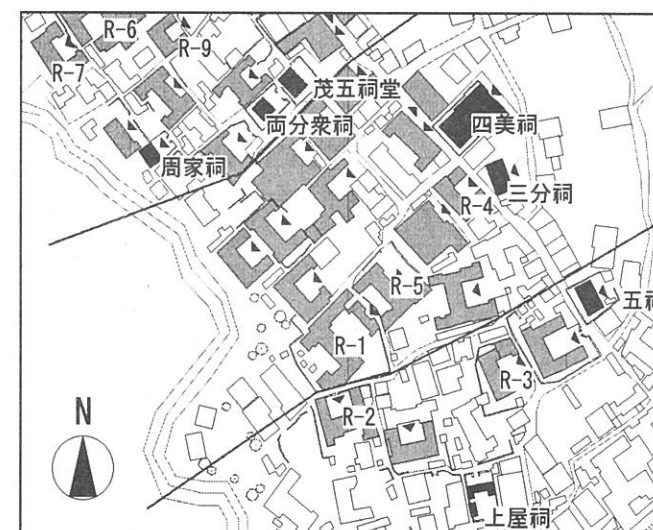


図4 蓬溪村(蓬2) アプローチ表記図
(▲アプローチ方向)

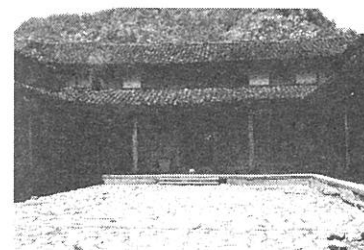


写真2 住居ファサード



写真3 路地

3 集落の集合形式

3-1 集落のまとまり

江南地域の集落は、共通の祖先から分かれた血縁集落で、その宗教システムに基づいた村落であり、一村に一姓氏となっている場合が多い。蓬溪村の場合9割以上の姓は謝氏で、村長が3名おり、南から蓬1・蓬2・蓬3と大きく3つに分かれている(図3)。残り1割にも満たない姓は周氏で、村内に分散し各々まとまり暮している。

3-2 集落における階層性

この3つの区域には階層性のようなものがあり、村を流れる鶴盛溪の上流に位置する蓬1が最も上層に位置していたようである。このまとまりは宗教施設である宗祠の使用や、後に述べる住居と宗祠の規模や装飾にも大きく関係している。集落全体をまとめる宗祠である康楽公祠の場合、建物を東西で分け、東を蓬1と蓬2が、西を蓬3が使用すると決められている。周氏には周氏のための宗祠があり、分けられていた。

4 アプローチから考察する集落

4-1 建設年代からみるアプローチ

図3より、まず主要道路北側の1960年以降に建てられた建物は主要道路に面するものである。伝統的住居および宗祠の向きは図4に示すように、大体北東を向いて建てられていることがわかる。

4-2 風水からみるアプローチ

住居が北東を向いているのは、蓬溪村が風水によって集落を形成し、「背山臨水」となるようにしているためである。「背山臨水」とは字のごとく、山を背にして川を臨める形が良しというものである。実測調査を行った蓬溪村の場合は、南西に山、北東に川があるため、大体の住居が北東向きとなっている。

だが蓬1にR-2など北向きの住居が見られた。はじめ、これはその住居の主要道路に依存しているのではないかと考えた。北西から南東へと伸びる主要道路が作られてから、その後の建物は風水など関係なく道路に依存して建っているからである。しかしR-2は建設年代が19世紀前半の古いものであり、矛盾する。そこで、より広範囲に集落環境を見てみると、南側にぐるりと廻りこんでいる山があることがわかる。ここから南の一部に北向きの伝統的住居が見られるのは、南に廻りこんでいる後方の山に「背山臨水」を厳守したため、一部向きが異なっていると考えられる。

5 伝統的住居

5-1 平面構成

平面構成の基本形式は、表3の3形式に分類された。正房と廂房および厨房による建築空間と、天井と呼ばれる中庭空間によって形成されている。正房は中庭に向かって配される主屋であり、主人の家族が接客空間や寝室として使用する。

廂房とは中庭の左右に配す脇の建物で、息子の家族、または兄弟の家族の住居として使用される。厨房は正房の横に配され、炊事や食事の場として使用されている。また、天井は作物を干す場や作業をする場となる中庭空間になる。

この分類は先行研究で明らかにされている他の江南地域集落の平面構成と同じであった。

5-2 生活の仕方

厨房や廂房をいくつかに分け、そのうちの空間にカマドをつくり台所とし、正房はおもにひとつの住居に暮す家族達の共同空間となっていた。浴室は無く水浴びなどで、トイレは外にまとまってあり、大きな壺を土に埋めその周りに囲いを設ける程度のものであった。

蓬溪村ではひとつの住居に、血族関係で大体2～3世帯、大きいもので3～4世帯が生活していた。

5-3 住居における階層性

伝統的住居に関しても階層性が感じられる。表2のR-1は蓬2、R-2とR-3の住居は蓬1にあり、蓬1や蓬2には規模の大きい伝統的住居が多い。中でもR-1(図5)は、磚門や天井を囲む壁に石の彫刻(写真4)が施してあった。

その一方、R-6は蓬3の中でも規模は大きい、装飾などは無く、シンプルなつくりとなっている。ほとんどの住居が図6のような三合院形式であった。

表2 調査住居平面構成分析表

蓬	蓬溪村	住居名	住居向き	平面構成
2	R-1	花 牆	北東	四合院
1	R-2	文之堂	北	三合院
1	R-3	清美堂	北東	三合院
2	R-4	李時晴宅	北東	三合院
2	R-5	玉徳堂	北東	H型変形
3	R-6	水院	北東	四合院
3	R-7	水院(後)	北東	三合院
3	R-8	水院(前)	北東	三合院
3	R-9	質屋	北東	三合院

表3 平面構成分類表

	「三合院型」 正房と廂房および天井によってコの字型を成している。これは格式を重んじた形である。調査住居のR-2・3・4・7・8・9がこのタイプであった。
	「四合院型」 天井を囲んで四方に建物が接続するタイプである。三合院型から、さらに私的空間の確保を目的としたと考えられる。調査住居ではR-1・6がこのタイプであった。
	「H字型」 三合院型に廂房と天井を後方にも設けた類型である。三合院を後ろにのばした形で、格式とともに生活空間の広がり求めたものであるといえる。

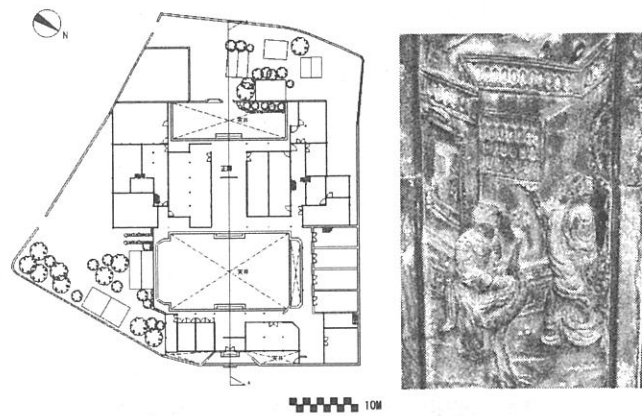


図5 R-1 花牆 平面図 写真4 彫刻

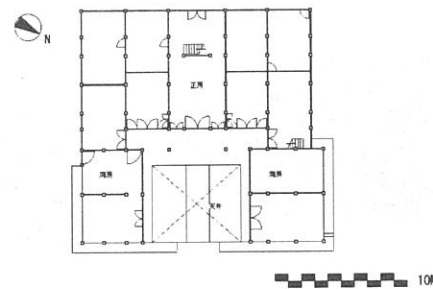


図6 R-9 質屋 平面図

6 宗祠

6-1 同族集落と宗祠

この蓬溪村は同族集落であり、表4に示すように自分たちの祖先を祀るため、それぞれ宗祠と呼ばれる宗教施設を設けている。宗祠とは同族集落の公共建築物である。宗祠は同族の象徴であり、同族の団結を起こさせその集落の秩序を維持する役割もある。

6-2 宗祠の平面構成

宗祠の平面構成は基本的に四合院の形式である。宗祠は宗教施設であるが、蓬溪村の場合それと同時に人々の住まいになっている場合もあり、四美祠と呼ばれる宗祠には3～4世帯の家族が生活していた。



写真5 天井

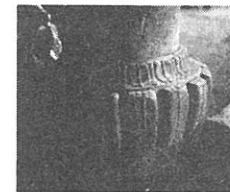


写真7 礎石

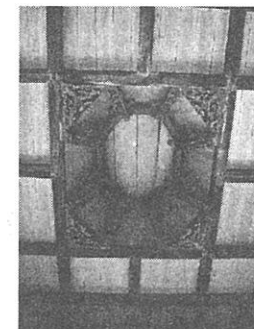


写真6 天井中央部

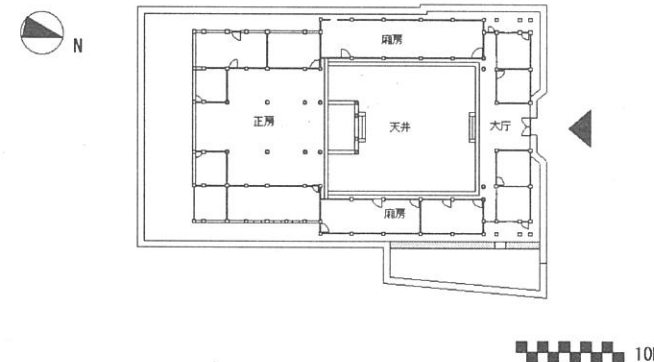


図7 四美祠 平面図

表4 宗祠分類一覧

	宗祠名
蓬1・蓬2	ひがしのそうし 東宗祠、しびし 四美祠、さんぶんし 三分祠
蓬3	だいせいそうし 大西宗祠、しょうにそうし 小西宗祠
共同・同家	こうらくこうし 康楽公祠、しゅうけし 周家祠
私人・血統祠	ごし 五祠、じょうやし 上屋祠(半焼)、りょうぶんしゅうし 両分衆祠(焼失)、にしにし 西二祠、もごしどう 茂五祠堂(半焼)
その他	かんていびょう 関帝廟、さんかんじい 三官爺、せんがんてん 仙岩殿

※実測調査を行った宗祠のみ網かけ

6-3 宗祠の装飾からみる集落

写真5, 6, 7は四美祠の写真であるが、組物、天井、礎石の装飾が豊かである。

しかしこの装飾もすべての宗祠に言えることではない。四美祠は蓬1、蓬2の宗祠であるが、蓬3の宗祠である大西宗祠や共通の康楽公祠にはこのような装飾は見られない。

これは集落構成の概要でも述べたが、集落の中にある階層性で、区域ごとの財力などによって装飾に違いが見られるのではないかと考える。

7 まとめ

研究の結果、以下のことが蓬溪村の集落、建築の特徴として挙げられた。

- ① 蓬溪村は謝氏が蓬1、蓬2、蓬3にまとまり、その区域には階層性が存在していた。少人数の周氏は各々でまとまり生活していた。
- ② 住居や宗祠のアプローチは、風水の「背山臨水」になるように建設されており、細かい集落環境に従ってその考えが厳守されていた。
- ③ 住居の平面構成は、集落全体をみて三合院形式とH字型形式が多く見られた。生活空間の広がり求めたH字型形式が多いというのは、血族同士で集まり世帯数の増加によって変化していったと思われる。
- ④ 宗祠の平面構成は四合院形式で、住居に比べると装飾性は高いが、その規模、装飾の多寡は区域ごとの財力などによって違いがみられた。

蓬溪村では、「同族集落」という血縁の関係と、風水に対する観念が重要であるといえる。この2つの思想が確固たるものであったため、集落形態や建築に表れたのであろう。

しかし集落形態や宗祠、住居に至るまで、これらの思想が重要視されたにもかかわらず、近代化に伴い、主要道路が通ってからはその思想に反して住居が建てられている。

伝統的な考えが軽視され、集落を変えつつあるのが現状である。

☆参考文献☆

- 箕浦永子「伝統的集落における住居形態の変容に関する研究—中国浙江省永嘉県芙蓉村および岩頭村を中心に—」2001年度東京理科大学卒業論文
- 李玉祥「楠溪江中遊古村落」1999
- 大西國太郎・朱自「中国の歴史都市」鹿島出版会 2001
- 伊原弘「中国人の都市と空間」原書房 1993
- 郭中端・堀込憲二「中国人のまちづくり」相模選書 1980

指導教員名 伊藤 洋子 教授